

福澤諭吉の『女大学評論・新女大学』を読む

んで

久保加津代

ある人のもの見方や考え方を知らうとする時に女性観が試金石になる、とかねがね思っていた。最近、福沢諭吉の『女大学評論・新女大学』を読む機会を得て、あらためてそのことに確信を抱くとともに女性観とはいっても一般論では抽象的で、やはり結婚観・離婚観、なかでも夫婦の役割についての考え方を詳らかにすることが大切だと思っている。

福澤は『新女大学』でいわゆる『女大学』の男尊女卑の陋習を批判し「日本婦人の為に……自尊自重以て社会の平等線に立たしめんと……」と男女の平等を標榜し、妾を排して一夫一婦を説き、家族だんらんの大切さを述べている。教育についても「兵学の他に、女子に限りて無用の学なし」と対等を唱っている。

しかし、少し具体的に彼の描く女性像を見てみれば、良妻賢母の図そのものといわなければならない。「配偶者を求むるは父母の責任にして」「既に結婚したる上は、夫婦は偕老同穴」「婦人が内を納めて家事に心を用い、織り縫い・績み緝ぎ怠る可からず、とは至極の教訓にして、如何にも婦人に至当の務めなり」「小児養育は婦人の責任」という調子で享保原板『女大学』と選ぶところがない。婚姻前の男女の自由交際について「社会全体に男女交

際法の区域を広くし、之を高尚にし、之を優美に」することが願うところではあるが「男女交際法の未熟なる時代には」「改良の事節を待つのみ」であり、結局は配偶者を求めるのは父母となるのである。教育についても女子には一切不必要な学問分野はないとしながらも、「女子は家の内事を司るの務めあるが故に学事、勉強の暇なし」「学問上に男子の併行す可からざるは自然の約束と云うも可なり」である。

夫と妻とは「家事経営に内外の別こそあれ、相互に尊卑の階級あるに非ざれば」役割分担のちがいはあっても夫婦は対等・平等であると主張するのだが、そもそも身分や性によって役割や職能が固定される生き方に自由や平等ということが考えられるものであろうか。

福沢諭吉という人は「人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という『学問のススメ』の一節があまりに有名であるために、浅学の私などは自由平等思想の持主であるかのように思っていたが、彼の女性論の総決算といわれる『女大学評論・新女大学』に接する限り文章のものやわらかさやめ新しさの陰にその真随をなすものは良妻賢母思想以外の何ものでもないという気がする。福澤の意図は如何であれ彼が明治政府の富国強兵政策をおし進め、家制度の強化をはかるために『女大学』の装いを新たにし、その本質に時代の風潮というスパイスをふりかけて、より魅力的に、より広く国民に伝播させる役割を果たしたことは確かかなようである。

(西南女学院短大(非常勤)・住居学、家庭管理)